

「坊っちゃん」の世界

—— 諸家の論にふれつつ ——

佐藤 泰正

「坊っちゃん」は、なかなか位置づけのむつかしい作品である。従来「漱石論」巻に、「坊っちゃん」論をもって一章を立てたものが殆んど見られぬことによつても、その一面はうかがわれよう。だがこの作の無類の味わいもまた見逃すことはできない。大岡昇平はこれを繰返し読んで飽くことのない「傑作」とよび、「こういう多彩で流動的な文章を、その後漱石は書かなかつた。また後にも先にも日本人はだれも書かなかつた」（昭和四一・一・九、「朝日新聞」）「一冊の本」（傍点筆者以下同）と嘆じている。また伊藤整は漱石の文学を論じて、「『坊っちゃん』は筋とユーモアの高潮と駆け上るような創作の完全さをもち」（角川書店「近代文学鑑賞講座」）「夏目漱石」云々と述べている。いずれもその物語の面白さもまたそれとして、とりわけ、その文体の無垢なる流露の完璧を嘆賞してやまぬかにみえる。

また伊藤整は「この小説ではじめて漱石は小説をかいたと云つていいであろう」ともいう。たしかに「羨虚集」の短篇より「吾輩は

「坊っちゃん」の世界 —— 諸家の論にふれつつ ——

猫である」の半ばに至る章を含めて、彼はこの時まで真に小説らしいものは書かなかつたといえよう。これに較べ、主人公の生い立ちのエピソードより、その都落ち、わずか一月ばかりの間に圧縮された様々な事件の起伏、そして再び都に帰り市井の生活に埋没する後日譚に至るまで、起承転結を踏まえた展開は、これに続く「草枕」や「二百十日」をも含めて、異なるものがある。しかし、にもかかわらず、これは果して「小説」たりえたか。あえていえばこれもまた「小説」ならぬ、「うた」ではなかつたか。いや、「うた」とは筆者の恣意の論ではない、漱石自身がそう語っているのだ。すでにふれた文体の無類の流露感もまた、これと無縁ではあるまい。

「坊っちゃん」執筆の要因にふれて、当時の漱石における「外界との相剋がもたらす鬱積状況からの脱却の試みが、作品形成の発火点になつてゐる」（小谷野純一「『坊っちゃん』解析」）という指摘は、また多くの論者の評する処である。たしかに「漱石はこの一篇で、居たたまれない現実に対する怨懣を痛快譚という構成で放出している」（梶木剛「夏目漱石論」第二章自己放出の諸形態、現在「試行」連載中）と言いうるし、これを初期の作品中の文脈におけば

「倫敦塔」の「空想」、「草枕」の「八非人情の世界」、「坊つちやん」の「痛快譚」——これらすべては「居たたまれない現実のゆえに非現実の世界にここを遊ばせるという構図」を示し、「ここに漱石の初期短篇群を貫く基軸がある」（同）かとみえる。漱石の鬱屈と怒りの放出はその書簡にもしばしば見られるが、特に三十九年六月より十月終りの頃まで、創作意欲の異常な昂まりとともに集中的に繰返し語られ、これが「坊つちやん」発表後、「草枕」「二百十日」の執筆と重なっていることが注目される。

今の世に神経衰弱に罹らぬ奴は金持ちの魯鈍ものか、無教育の無良心の徒か左らずば、二十世紀の軽薄に満足するひやうろく玉に候。／もし死ぬならば神経衰弱で死んだら名譽だらうと思ふ。時があつたら神経衰弱論を卓して天下の犬どもに犬である事を自覚させてやりたいと思ふ。（明治三九・六・七、鈴木三重吉宛書簡）

天下の犬を退治れば胃病は全快する。是が僕の生涯の事業である。外に願も何もない。（同六・一二、加計正文宛）

犬は殺さざるべからず。豚は屠らざるべからず、猪子才は頓首せしめざるべからず。（同六・二三、野村伝四宛）

さらにはまた次のごとくも言う。

小生は生涯に文章がいくつかけるか夫が楽しみに候。又喧嘩が何年出来るか夫が楽しみに候。（略）世界總体を相手にしてハリツケにでもなつてハリツケの上から下を見て此馬鹿野郎と心のうちで輕蔑して死んで見たい。（同七・三、高浜虚子宛）

小生千駄木にあつて文を草す。左右前後に居るもうろくども一

切気に喰はず朝から晩迄喧嘩なり此中に在つて名文がかけぬ位なら文章はやめて仕舞ふ考なり。（略）喧嘩しつゝ、勉強をしつゝ、文章をかきつゝ、もうろくどもがくたばる迄は決して千駄木をうつららずして、安々と往生仕る覚悟なれば……（同八・六、森田米松宛）

もはや逐一挙げるまでもあるまいが、かくして八月十一日、高浜虚子宛の書信に次のごとき言葉がある。

「御前が馬鹿なら、わたしも馬鹿だ。馬鹿と馬鹿なら喧嘩だよ」今朝かう云ふうたを作りました。此人生蠶を布疋していつか小説にかきたい。相手が馬鹿な真似をして切り込んでくると、賢人も巴を得ず馬鹿になつて喧嘩をする。そこで社会が墮落する。馬鹿は成程社会の有毒分子だと云ふ事を人に教へるのが主意です。先づ、当分は此うたをうたつてゐます。小説にしたらホト、ギスへ上げます。（同八・一一、高浜虚子宛）

「先づ当分は此うたをうたつてゐます」とは前後の文脈よりしてその創作への基本的な姿勢を示すものであろう。この書信が「九日迄連日執筆」（八・一〇、小宮豊隆宛）という「草枕」を書き上げ一息ついた、その余情の裡に草されたものであることも留意しておいてよからう。

「只今ホト、ギスの分を三十枚余認めた所。何だか長くなりさうで弱は候。夫に腹案も思ふ様に調はず閉口の体に候。実を申すと今日杯はぶら／＼白帆の見える川べりでもあるきたい所に候」（一七、滝田樗蔭宛）」とは、「坊つちやん」執筆中の言葉だが、後半の感慨は評家も指摘することく、まさに「草枕」の世界に接

続」(竹盛天雄「坊つちやんの受難」)しており、しかし「現実の漱石は濛虚碧堂となづけた書齋の中に陰鬱な表情を浮かべて棲みながら、『白帆の見える川べりをおる』く代りに、都より地方へ下る坊つちやん像を原稿用紙の上に放射し噴出させ」(同)でいたこととなる。しかもこの感慨はさらに「坊つちやん」一篇を書き終った後もまた——「どうか春晴に乗じて一日川があつて帆懸舟の通る所へ行つて遊びたい」(明治三九・四・一、高浜虚子宛)というふう

に続く。ここから「草枕」の世界はひと続きであり、主人公の「画工は紛々たる俗人情を晒と」し、「非人情の旅をしてしばらくでも飄浪しやう」(同九・三〇、森田米松宛)とする。この「二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此出世間的の詩味は大切である」と言い、画工は「淵明、王維の詩境を直接に自然から吸収して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したい」(「草枕」一)と願う。

漱石はここにみずから言うごとく、「世間普通にいふ小説とは全く反対の」、「唯一種の感じ——美しい感じが読者の心に残りさへすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない。さればこそ、プロットも無ければ、事件の発展もない」(「余が『草枕』」)という一篇の「俳句的小説」を描いてみせたが、敢て時代を日露戦争下にとつたこの作品の意図が、「ひとりの画工を主人公とする唯美的非人情の世界を、そういう反唯美主義的な現実の情況を向うにまわしてあえて成り立たしめよう」(寺田透「草枕の文章」)としたものであることは明らかであろう。すべてを「画中の景」と見んとする主人公の(同時に作者自身の)意図は、駅頭に出稼ぎのために満州へ旅立つ前夫を送る、那美さんの顔に一瞬浮ぶ「憐れ」を

「坊つちやん」の世界 — 諸家の論にふれつつ —

見て、「余が胸中の画面は此咄嗟の際に成就したのである」という結尾の一句に、見事に「完結」(寺田透)したとみることもできよう。

だが同時にまた、この「画中の景」が背中合せに、殆んど紙一重に、現実の苛酷さを孕んでいることも見逃せまい。いや、敢ていえば、那美さんも男も、また語り手自身も、その背後の現実世界のあらわな滲出と対峙せざるをえず、そのあやうさの只中に引き出されるをえぬ——その破れのなかに、あの終末の「成就」はなされたのではなかったか。「愈々現実世界に引きずり出された。汽車の見える所を現実世界と云ふ」——一行が停車場に着くと同時に、語り手の筆は一転して文明論に走り、「汽車程二十世紀の文明を代表するものは」なく、「あらゆる限りの手段をつくして、個性を發達せしめたる後、あらゆる限りの方法によつて此個性を踏み付け様とする」苛酷な文明の象徴を汽車に見るといふ。「余は汽車の猛烈に、見界なく、凡ての人を貨物同様に心得て走る様を見る度に、客車のうちに閉じ籠められたる個人と、個人の個性に寸毫の注意をだに払はざる此鉄車とを比較して、文明の孕む「あぶな」さを憂う。

「やがて那美さんの前から男を連れさつてゆく汽車は、皮肉な運命という以上に、ついに二十世紀の住人に安らかな「睡眠」を与えよう」とせぬ苛烈な文明の象徴であり、この文脈上にあの結尾の一節をおけば、那美さんの顔に浮ぶ「憐れ」の背後に、「画中の景」よりすでに覚めざるをえぬ、作者のいがい眼差を讀みとることが出来よう。「愈々現実世界に引きずり出された」という先の一句は、この結尾と照応してゆるがぬものとみえる。画工は胸中にきざす「汽車

論」（即ち文明論であろう）は「写生帖へかく訳にも行かず」、「満州の野に吹く風の臭ひも知らぬ。現代文明の弊をも見認めぬ。革命とは如何なるものか、文字さへ聞いた事もあるまい」二人の男を写生する。これもまた皮肉な対照というほかはなく、さらに、文明の圧迫下にあえぐ個人の内部にきざす「革命」にふれ、「此革命の起るべき状態に就て具さに其例證を吾人に与へた」イブセンへの言及も見逃せまい。先にふれた「草枕」の余情とは、これらすべてを含む。と同時に、「当分此うた丈うたつてゐます」という、その「うた」もまたこれらすべてを包含するものであり、これを「小説にしたらホト、ギスへ上げます」という——これが後に「二百十日」（明治三九・一〇）を経て、「野分」（明四〇・一）一篇として発表されたことは付言するまでもあるまい。

「二百十日」はいささか草卒の間かんにしたためられたものであり（九月六日より九日までのわずか四日で書き上げられている）、「野分」の「言はばイントロダクションのやうなもの」（小宮豊隆）ともみられる作品だが、その末尾は——「我々が世の中に生活してゐる第一の目的は、かう云ふ文明の怪物を打ち殺して、金も力もない平民に幾分でも安慰を与へるにあるだらう」という慷慨家の圭さんの言葉とともに、これに呼応するかのごとく「轟々と百年の不平を限りなき碧空に吐き出」す阿蘇の姿をもって閉じられる。山里の「澄みきつた空の底に響き渡る」鍛冶屋の音をもってはじまるこの作もまた、「文明の皮を剥くのだ」と言い、「文明の革命」をやるのだという圭さんの批判、慷慨をもってつらぬかれ、怪物退治の宣言をもって終ることとなる。漱石が「坊つちやん」「草枕」「二百十

日」の三篇を「鶉籠」一巻に収め、その序に——「集中収むる所三篇、取材一ならず、趣旨固まり同じからず。著者はたゞ此三篇によつて、其胸中に漂へる或物に一種の体を与へたるを信ず」という時「其胸中に漂へる或物」の何たるかはすでに明らかである。

これら三篇のすべてにあつて「都より地方へ下る人間が主人公としてえがかれている」（竹盛天雄）ことが注目されるが、同時にその都落ち、あるいは旅への志向が、文明社会や現実への鬱屈、忿懣よりの自己解放、あるいは無垢なる自然の慰藉や「出世間の詩味」（「草枕」）への没入、投身というモチーフを抱くとみえつつ、同時にその底に、現実そのものへの回帰の深い衝迫を孕んでいることもまた見逃せまい。これはまた晩期、「明暗」と並行して作られた漢詩が「俗了」された心を洗い濯ぐためと言いつつ、また同時に「俗了」の世界を凝視せんとする認識者の姿勢を色濃くにじませていることともあい通ずるものであり、漱石における放と執との交錯の機微にかかわる処でもある。

「草枕の様な主人公ではない。あれもいゝが矢張り今の世界に生存して自分のよい所を通さうとするにはどうしてもイブセン流になんてはいけない」（明治三九・一〇・二六、鈴木三重吉宛書簡）とは、「草枕」より「野分」への転回を示す言葉としてしばしば引かれる処だが、「イブセン流」云々とは、すでに「草枕」末尾に語る処でもあり、「野分」への発展は当然の帰結であろう。かくして「うた」は「小説」に仕立てられたが、なおそれは本質において「うた」を脱皮しえたとは言いえまい。「吾輩は猫である」にふれて、「出来るならば、あんな馬鹿氣た事を生涯かいてゐたい。そ

れでない、腹へつめたものがもたれて困る」(三九・八・二八、小宮豊隆宛)と語る漱石は同時に、「迷亭が喋舌つても苦沙彌が述べても同じ語気である」という評者の「非難」を「御尤もなる攻撃に候」とも記している。この「非難」はまた「猫」のみのものではない。漱石はこの矛盾を敢て承知で「猫」を書き、「坊つちゃん」を書き、「草枕」「二百十日」、さらに「野分」と書きつづけていたはずである。

「うた」を小説に仕立てる以上、この矛盾は避けられまい。これらの作中の人物や語り手の慷慨は、「野分」に至るまでついに「うた」の発想を出でずして終ったともいえる。ただ「野分」に至って主人公である「文学者道也」の論理を相対化できる妻の論理が対置されて(「越智治雄「野分」) いること、言わば「生活者の論理」という視点が導入されていることは見逃せまい。しかもなお「文学は人生其物である」という「文学者」白井道也の認識が、「人生」そのものの矛盾を領略しうるものではありえなかったこともまた明らかである。漱石がこの発想の転換をしいられるのは、朝日入社後、職業作家、また新聞小説の作者としての出発をみずからに課してより後のこととなる。

さて、「坊つちゃん」の周辺を語っていきさか長きに失したかともみえるが、以上の文脈中におけば、「坊つちゃん」一篇のありかたはおのずからに浮彫りされて来よう。それは漱石がまさしくその「うた」を、最も純一に、また無難に直敘し、うたいあげた無二なる作品というべく、そこに我々はおのずからなる作者内奥のパーソナリティの滲出を、そのあざやかなるしを読みとることが出来よ

「坊つちゃん」の世界 — 諸家の論にふれつつ —

う。

二

「坊つちゃん」のなかで最も注目すべきは、その末尾の一節であろう。赤シャツや野だに天誅を加え、東京に引き揚げて来た主人公は、やがてそのまま市井の生活に埋没し、最愛の清は死んでしまふ。それは簡略な後日譚の付記ともみられるが、むしろ一篇のこなめはここにある。

清の事を話すのを忘れて居た。——おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革靴かばんを提げた儘、清や帰つたよと飛び込んだら、あら坊つちゃん、よくまあ、早く帰つて来て下さつたと涙をばた／＼と落した。おれも余り嬉しかつたから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云つた。

其後ある人の周旋で銜鉄の技手になつた。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関付きの家でなくつても至極満足の様子であつたが気の毒な事に今年の二月肺炎に罹つて死んで仕舞つた。死ぬ前日おれを呼んで坊つちゃん後生だから清が死んだら、坊つちゃんの御寺へ埋めて下さい。御墓のなかで坊つちゃんの来るのを楽しみに待つて居りますと云つた。だから清の墓は小日向の養源寺にある。

こうして「無事銜鉄にとどまり、月給二十五円、家賃六円で清とうちを持つて暮らしている坊つちゃんというのはすでに坊つちゃんではない。作品の真実から言えば帰京して銜鉄にとどまっている坊つちゃんはウソであり、坊つちゃんは死んだのである」(平岡敏夫

「坊っちゃん」試論——小日向の養源寺——という評者の指摘は肯くべき処であろう。たしかに漱石は坊っちゃんの死を描き、その市井への埋没を描いた。それは単なる後日譚ではなく、まさに描くべくして描いたあざやかな作品の終結部といえよう。また作者は坊っちゃんの死とともに清の死をも描いた。しかも「死んだら、坊っちゃんの御寺へ埋めて下さい。御墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待つて居ります」と清はいう。この「実に異様なことば」の感觸にふれて平岡氏は、これは「父母の言うことばでも兄弟姉妹の言うことばでもない。下女の婆やといっしよに墓に眠るべき男。この奇妙で無気味なイメージは、下女の婆やのかわりに、恋人か愛妻を入れかえれば、もつともびつたりする。ここには、実は恋人・妻のイメージがあるのではないか」と言い、またこの言葉にこもる「深いかなしみ」にふれては、「ある切実な愛、現実のものではなく、死によつてへだてられ、そのことによつてもつとも切実に成り立ち得た愛の存在」とは何かと問いつつ、この痛切なイメージの背後に、漱石の生涯の思慕の対象であった「嫂登世の存在」を指摘している。

これは幾多の創見に富むこのすぐれた論攷の中心となる指摘であり、たしかに坊っちゃんの出立に際して、別れを惜しみ、甘えを見せる清の姿に纏綿するもの、またこの末尾の異様な印象など、評者の指摘はまさに鋭いものがある。しかし私はいま、この部分についてはいささか別様の見解を持つ。結論をいえば、このイメージの背後にはさまざまな屈折があり、登世への思慕をはじめとする漱石における永遠なる女性のイメージの纏綿もそのひとつではあるが、

その中心となるものはやはり亡き母千枝への思慕かと思われる。もとより母千枝とのつながりはすでに諸家の指摘する処であり、こと新しいことではないが、しかし坊っちゃんの死と清の死を重ね合わせた終末の意義とその必然についていささか考究する処があるので、それを述べてみたい。

「坊っちゃん」が教師を主人公としながら、そこには教師と生徒との精神的交流はなく、特定の生徒ひとりも登場せず、すべては生徒一般として描かれ、しかもそれが主人公の悪罵や批判の痛烈な対象となつて居ることは、これもまた異様なことというほかはあるまい。

学校へ這入つて、嘘を吐いて、胡魔化して、陰でこせ／＼生意気な悪いたづらをして、さうして大きな面で卒業すれば教育を受けたもんだと欄邊をして居やがる。話せない雑兵だ。(四)

いくら人間が卑怯だつて、こんなに卑怯に出来るものぢやない。まるで豚だ。かうなれば隠れて居る奴を引きずり出して、あやまらせてやる迄はひかないぞと、……(同)

よく考へて見ると世の中はみんな此生徒の様なものから成立して居るかも知れない。人があやまつたり詫びたりするのを、真面目に受けて勘辨するのは正直過ぎる馬鹿と云ふんだらう。あやまるのも仮りにあやまるので、勘辨するのも仮りに勘辨するのだと思つてれば差し支えない。もし本当にあやまらせる気なら、本当に後悔する迄叩きつけなくてはいけない。(十)

もはや逐一挙げるまでもあるまいが、この語調はそのまま先の書

簡にみる、天下の「犬」や「豚」どもは「屠らざるべからず」の批判につながる。言うまでもなく生徒一般はそのまま世間一般でありこれはただ教育の場を仮りの舞台とした、漱石一流の文明批判、社会批判とみるべきであろう。もとよりこの作品をなした機因に、この年の二月十五日、十七日付の姉崎正治宛の書簡、さらには当時の文科大学長坪井九馬三宛の二月二十三日付の書簡に記された英語入試委員辞退にみる、当時の大学の「御屋敷風御大名風御役人風」な事大主義とも權威主義ともいうべきものへの忿懣や批判もあるが、その根底にあるものは単なる教育あるいは教育界批判ならぬ、社会一般の風潮への痛烈な忿懣、鬱屈の放射であろう。

しかも主人公は「是でも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で多田の満仲の後裔だ。こんな土百姓とは生れからして違ふんだ」(四)という。山嵐が「会津つば」であり、清もまた「もと由緒のあるものだったさうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公迄する様になつた」(一)と書かれていることは、これら三者がともに「士族階級」、さらにいえば「佐幕派士族」(平岡敏夫)ということになるわけで、ここに「薩長藩閥政府の下で立身出世の道を断られた」者と、その「反極にある」狸や赤シャツ、さらには「それにへつらう野だなどの存在」(同)という対立の図式の生まれることも、評者の指摘する通りであろう。ここに「坊つちやんを中心とする清い世界と赤シャツを中心とするきたない世界」(梅原猛「浄」という価値」)という勧善懲惡的な図式と重ねて、開化の推進とともに敗れ去った者の側からの開化批判という、漱石固有のモチーフがあらわれて来る。「つまり漱石は清い世界の人物を伝統的価値をになう時代

の敗残者にあて、きたない世界の人物を、ヨーロッパ文明を採用している時代の支配者にあてている。この「坊つちやん」全体は日本近代を支配するきたない世界にたいする漱石の猛烈な抗議から生れたものであろう」(同)ということとなる。

かくして「清という老女」を「維新以後の東京において、急速にうしなわれつつあった江戸的なものの象徴」と見、坊つちやんの「親譲りの無鉄砲」というその「親譲り」とは、「両親というよりももっと本源的な「祖」としての江戸的なものをさしている」(竹盛天雄)という指摘も生まれて来ることとなり、「坊つちやんが「親譲り」の性格のゆえに、家や肉親・町内というような準拠すべきグループから疎外され、他人には「木の端」のような扱いを受け、わずかに時勢にとり残された老女の偏愛によって慰められるという設定には、明治的現実の中で日に実体を喪失してゆく江戸的なものの運命をよみとることができはるはずである。少数派の孤立、これが坊つちやんの上に投げかけられた宿命なのだ」(同)という指摘もまた肯ける処であろう。たしかに坊つちやんの孤立、敗北の相は疑うべくもない。

しかしそれにしても、この主人公にみる非現実性、あるいは極度な「幼児性」ともいうべきものは何であろう。この作品の「側面をなす「知識階級」批判も、「諷刺は坊つちやんという、現実には存在しえぬ「妖精」の設定によつて、成功している」(江藤淳「夏目漱石」とはいうものの、また「一度、坊つちやんが現実の人間になつた時生ずる愚劣さは論を」(同)まっまい。これは「結果としては、希望も信念もないきわめて今日的な青年が、自己の内にあ

る幼児性を逆手にとつて、世の大人の壁に叛逆したものの、壁を破れないまま次第に孤立し、むしろ、自己の純粹さと方向を見失つてしりすばまりに退行していく悲劇」(相原和邦「坊っちゃん」論)ともみえる。しかしまた漱石自身、これらの批判のあるべきことを充分に予期していたことは——「坊っちゃん」と云ふ人物は或点までは愛すべく、同情を表すべき価値のある人物であるが、単純過ぎて経験が乏し過ぎて現今の様な複雑な社会には円満に生存しにくい人だと読者が感じて合点しきへすれば、それで作者の人生観が読者に徹したと云うてよいのです」(「文学談」明三九・九「文芸界」)という言葉にも明らかであろう。この点、この主人公は「はじめから現実と真剣に取りくんで、あくまでもこれを改変せずにはおかないという熱意と愛情とをもたなかつた」「あの田舎に永住する決心をしなければ、真に強力なモラリズムは生まれず、その自称する潔白も本物にならない」(吉村善夫「夏目漱石」という批判は、いささかの外れたものであり、坊っちゃんにおける「甘え」(土居健郎「漱石の心的世界」という精神医学的視点よりの論者の指摘も、敢ていえば作者は承知の上でのおのずからな叙述であつたというべきであろう。

しかしここで肝心なことは、これらの機微が実は、作者のパーソナリティのおのずからの漏洩、あるいは滲出という側面と深くかかわっていることであろう。「坊っちゃん」における人物の設定は、評者もいふごとく外形上赤シャツこそ作者漱石に最も近く、「主人公と作者の落差」(相原和邦)はむしろ深いというべきであろう。即ち「坊っちゃん」のモデル詮議ということになれば「赤シャツは

即ちかういふ私の事にならなければならぬので……」(「私の個人主義」)と、後年冗談めかした言葉のなかでもふれている通り、赤シャツが文学士であり、英文学の徒であり、俳句をたしなみ、「赤シャツは時々、帝国文学とか云ふ真赤な雑誌を学校へ持つて来て難有さうに読んでゐる。山嵐に聞いて見たら、赤シャツの片仮名はみんなあの雑誌から出るんださうだ。帝国文学も罪な雑誌だ」(五)という、その「帝国文学」もまた漱石とゆかり深いものであつたことは付言するまでもあるまい。これに反し坊っちゃんは物理学校を出た数学教師であり、俸給は四十円、これは松山中学時代の漱石の半額にすぎぬ。またその父母にうとんじられ、たったひとりの兄とも肌があわず、父母の亡きあととは兄とも別れ天涯孤独となる坊っちゃんは、漱石の不幸な生い立ちに通うものもないわけではないが、その環境の設定にはかなりの違いがみられよう。先ずなによりも母にさえうとんじられた坊っちゃんの肉親よりの完璧な離脱は、終生その愛を覚えつつ母への思慕を抱きつづけた漱石とは大いに異なる。明らかに作者は現実の自己とは遙かに異なる場所に主人公を据えて、物語を展開せんとしている。だがその内実は叙述の進展とともに——「おれは何事によらず長く心配しやうと思つても心配が出来ない男だ」(三)と言ひ、「思ひ切りは頗るいゝ人間である」(同)という、その口のうらから「何だか生徒全体がおれ一人を探偵して居る様に思はれた」(同)と思ひ込むようになり、また「おれは性来構はない性分だから」(七)と言ひつつ、「急に世のなかを物騒に思ひ出した」(同)りするようになる。ここには明らかに漱石自身の被害妄想や探偵恐怖症、被迫跡妄想などがみられ、「坊っち

やんがまぎれもなく漱石の分身」(平岡敏夫)であることを示す。かくして「作者の意図を裏切る形で、主人公は作者に接近してくる」(相原和邦)こととなるのだが、しかしこの矛盾は果して、本来の「作者の意図を裏切る」ものであつたらうか。むしろ作者は、両者の「接近」にみずから委ねたふしはないであらうか。外形の離反にもかかわらず、その内質において両者が深く重なり、あい溶けあつてゆくかと思える、この二者の離反融合の機微は、この作品の終結部においてきわまるかと思える。即ち先にもふれたこの作品のかなめともいふべき、坊っちゃんの死と清の死にかかわる部分である。

もはやこの小稿の結論ともいふべきものを呈示してよからう。坊っちゃんの死、その内的な死とは何か。それはほかならぬ、作者の内におけるいまひとりの自己の死ではなかつたのか。ありうべかりし、いまひとりの漱石の死を語るものではなかつたのか。恐らくこれを述べれば明治十四年、漱石十五歳の折の母千枝の死がひとつの分岐点とならう。

三

漱石の母千枝が亡くなったのは明治十四年一月二十一日のことだが、漱石は間もなく中学をやめて漢学塾、二松学舎に転じている。彼の通つていた東京府第一中学校はいわゆる正則中学校であり、英語の課程は含まれていなかった。「英語を修めてゐぬから、当時の予備門に入ることが六ヶ敷い。これではつまらぬ、今まで自分の抱てゐた、希望が達せられぬことになるから、是非廃さうといふ考を

「坊っちゃん」の世界 — 諸家の論にふれつつ —

起した」(「私の経過した学生時代」)云々とは、後の漱石の回想する処だが、こうして入学した二松学舎も——入学は恐らくこの年の春頃と思われる——この秋十一月にはすでに退いているようである。漱石はこの間の事情にふれて、「元来僕は漢学が好で随分興味を有つて漢籍は沢山読んだものである。今は英文学などをやつて居るが、其頃は英語と来たら大嫌ひで手に取るのも厭な様な気がした」。だが「考へて見ると漢籍許り読んでこの文明開化の世の中に漢学者になつた処が仕方なし、別に之と云ふ目的があつた訳でもなかつたけれど、此儘で過ぐすのは充らないと思ふ処から、兎に角大学へ入つて何か勉強しようと思ひした」。そして大学予備門へ入るため成立学舎に入り、「好な漢籍さへ一冊残らず売つて了ひ夢中になつて勉強し」「其年(明治十七年)の夏は運よく大学予備門へ入ることが出来た」(「落第」)と語っている。しかもこの二松学舎をやめて、十六年九月成立学舎に入るまでの二年近い空白については、漱石は何事も語っていない。また二松学舎では「漢学許り専門に習つてゐたが、英語の必要——英語を修めなければ静止してゐられぬといふ必要が、日一日と迫つて来た」(「私の経過した学生時代」)ともいふ。

すでに見るごとく、ここにはさまざま矛盾がある。正則中学をやめた理由からいえば二松学舎に転じたことは大きな矛盾であり、また「英語を修めなければ静止してゐられぬ」ほどの焦燥があつたとすれば、その後成立学舎入学までの二年近い空白もまた不審である。後年のこれら回顧談の文脈の、背後にとりこぼされているものは何か。恐らく先の矛盾は、まさしくその矛盾の故に、当時の漱石

内面の彷徨をあざやかに語るかとみえる。自己の本然の世界に生きんとする渴望と、それらの一切を切り捨てても時代の主潮にとり残されまいとする志向と——このあらがいはそのまま、評家が「儒学と洋学の間」と題し、「新旧ふたつの時代、あるいは世間像のあいだに落ちこんで、行きくれている幼い魂」の、その「亀裂」（江藤淳「漱石とその時代」第一部）の刻印とも評する処のものであり、また「少年漱石の中の、東洋か西洋か——西か東かの戦ひの第一声」（小宮豊隆「夏目漱石」）とも見ることができよう。

かくして彼が選びとった「洋学」の道は、その新たな未来を約束するとともに、また彼が切り棄てざるをえなかつた「本然」のものによつて、手痛い復讐を受けることもなる。「英文学に欺かれたるが如き不安」（「文学論」序）を大学卒業後も松山、熊本、さらにはロンドン留学に至るまで抱きつづけたというが、彼を欺いたものは「英文学」ならぬ「開化」という化物、あの「文明の怪獣」そのものであつたといふべきであろう。たしかに「自分一身の趣味に根柢を置く生き方をあきらめることが、生涯にわたつてどんな苦痛を支払わなければならないかを、十代おわりの青年金之助は知るよしもなかつた」（桶谷秀昭「夏目漱石論」）というほかはあるまい。

さて先の謎にかへつて問えば、二松学舎転入の背後には、母干枝の死が大きくはたらいたとみるべきであろう。

「私も十五六歳の頃は、漢書や小説などを読んで、文学といふものを面白く感じ、自分もやつて見ようといふ気がしたので、それを亡くなつた兄に話して見ると、兄は文学は職業にやならない、アッコンブリッシメントに過ぎないものだ」と云つて、寧ろ私を叱つた」（

「処女作追懐談」という漱石の言葉によれば、元來漢籍が好きであり「余兒時誦唐宋數千言喜作爲文章」（「木屑録」序）と言ひ「余は少時好んで漢籍を学びたり。之を学ぶ事短かきにも関らず、文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり」（「文学論」序）ともいふ漱石にとつて、二松学舎への入学は好きな文学の道への志向を含んでいたかとも思われる。漢学によつて文学の何たるかを解した少年の、それは本然的なものへの回帰のひとつのあらわれであつたかもしれない。だがあえて「出世よりも、好きな漢籍にひたる出世間的態度に心をひか」しめたものは、やはり「実母干枝の死」（瀬沼茂樹）であり、その死に「無常を感じ、「立派な人間になつて世間に出」ようとあくせくするよりも、自分の好きな事をして一生を暮す方が、遙に良い事であるといふやうな心持に、一時的にでも、なつたものかも知れない」（小宮豊隆）という評家の指摘も肯くべき処であろう。さらにいえば、彼はその「『不安』に唯一の安息をあたえてくれた母を追つて、漢学のあたる過去の世界像のなかへ埋没したいと思つたのかも知れない」（江藤淳）。これは「明らかに未来の拒否で」あり、「生存競争の現実を拒否し、安息の世界を希求しようとしたともいえる」（同）であろう。敢て天下「有用の士」たらんとする少年漱石の心の張り、母の死によつて崩おれ、みずからの本然に、「自然」に生きんとする衝迫の、とどめがたきものがあつたと思われる。しかもまたその処に、「静止」せしめぬものが何であつたかはすでにふれた。

開化を評して、「今日の吾人は過去を有たぬ開化のうちに生息してゐる」「明治の四十年は先例のない四十年である」（野分）とし

で、作中烈々として青年に自由を説く反面、「悲しいかな今の吾等は刻々に押し流されて、瞬時も一所に低徊して、吾等が歩んで来た道を顧みる暇を有た」ず、「歴史を有せざる成り上りもの如くに、たゞ前へ前へと押されて行く」「吾等は渾身の氣力を挙げて、吾等が過去を破壊しつつ、斃れる迄前進するのである」(「マードック先生の日本歴史」ともいふ漱石にあって、自己もまた単に開化の被害者ならぬ、加害者でもあったという負い目は深かったはずである。「涙を呑んで上滑りに滑つて行」(「現代日本の開化」)くはかはないという、その言葉の背後に、この加害者たることのがい体感をも見逃すことはできない。

後の「こゝろ」一篇における「Kと先生の惨劇」が評家の指摘するごとく「作者漱石に即せば、ロンドン留学以前と以後の二人の間の劇にほかなら」(桶谷秀昭)ぬとすれば、漱石の内部における矛盾と負い目は明らかであろう。Kの死があゝの「破壊」され蹂躪された「過去」の象徴であったごとく、坊っちゃんかみの死もまた、開化の巨大な車輪の下に蹂躪された多くの敗者の象徴であるとともに、先ずなによりも作者みずからの裡に圧殺された古きもの、本然なるものあかしであったということができよう。かくして坊っちゃんかみは名もなき庶民のひとりとして、市井の間にみずから埋没せしめてゆく。その背後に死屍累々たる開化という怪物の正体が、また坊っちゃんのごとき存在を許さざるこの社会の腐蝕が見えて来れば、それで作者の「人生観」が、思想が、「読者に徹した」ことになるはずで作者のいう処である。Kの死を負い目としつついにKの死に殉じてゆく、それが同時に、「明治の精神」への「殉死」であっ

「坊っちゃん」の世界 — 諸家の論にふれつつ —

た先生の背後に、明治という時代が自己にとって何であったかを問う作者漱石の眼がまぎれもなく見えるとすれば、赤シャツという唾棄すべき人物になお自己の一面を写さんとした作者の、そのにがい自己諷刺の眼差もまた理解できよう。

市井の塵のなかに名もなき者として消えゆく坊っちゃんかみは、あの母の死とともに本然の世界に生きんとした漱石の、いまひとりの自己の、そのありうべかりし姿ではなかったか。この時彼を待つものは、もはや「母なるもの」以外のなにものでもあるまい。「御墓のなかで……待って居ります」とは、言わば「母胎回帰」の志向にもつながるものであり、清の背後にあの「母なるもの」の本源としての母千枝のイメージが重ね合わされていることは疑いあるまい。漱石は晩期のエッセイ「硝子戸の中」の末尾に、最も忘れがたい母の想い出として——少年時代、悪夢から覚め罪のおびえをつける彼の前につけて、微笑しつつ慰めを与えた母の忘れがたい姿を語っているが、これはもはや現実の追憶をこえた普通の、「母なるもの」のあかしというほかはあるまい。しかもまた母の晩年に生まれた彼にとって、それは常に「お婆さん」というイメージしかなかったという。「坊っちゃん」のなかで清が繰返し「婆さん」だと言われていることもまた、これと無縁ではあるまい。

小谷野純一氏は先の論攻で、この清との母との関連にふれてすぐれた論証をされているが、そこに指摘されているごとく清の眠る「小日向の養源寺」の、その「小日向」が、最初原稿では「小石川」となっており、それが漱石の母の死後、家族をはなれ「明治十七年の頃」住んでいたという小石川の新福寺での生活の、「母を喪った悲

痛な自己に立ち向い続け」ていた時期の忘れがたい刻印を遺したものであったとするならば、母との合一への願いは、ここにも色濃くあらわれていたのかというほかはあるまい。ただ小谷野氏は、「『清』の設定」はこの作品の本来的な流れを「母と子の肉感的な物語へと移転」せしめてしまったと述べている。しかしこれはむしろ物語の主脈の転移ならぬ、必然の合一であったとみるべきではあるまいか。

漱石が母への思慕にまつわる一篇の作をなしたのは、これが最初でありまた最後であった。これをありうべかりし自己への鎮魂の作と見るならば、「母なるもの」への帰一のモチーフは必然のものであり、それは彼の作品が、いまだ「うた」でありえた蜜月の時期の、ふたつなき天与の収獲であったとも言うことができよう。